

P-2-20

倫理的視点でデスカンファレンスを実施して

安曇野赤十字病院 医療社会事業課

○宮田 みゆき

当訪問看護ステーションでは、年間20人程の在宅看取りと多くのターミナルケアを実施している。訪問看護師は利用者の生活の場で様々な問題に留意し多職種との調整にも対応、家族のグリーフケアも行う。多くのジレンマを抱え、お看取り後は燃え尽き感を感じ倫理的問題が発生している。当ステーションでは、以前経験したデスカンファレンス(以下デスカンファ)でお互いを批判した経験があり避けてきた。そこで、倫理的な視点を持ってデスカンファを行うことを計画した。倫理4分割法で利用者の全体像を見つめ倫理的問題や看護の視点、実際、振り返りを行った。発表に際し、訪問看護師には文面で、症例のご家族には電話にて説明し同意を得た。師長が倫理4分割法用紙にあらかじめ大まかな情報を記入し、デスカンファでは各看護師が持っている情報を出し合い全体像を捉えた。倫理的問題は「看護者の倫理綱領」を参考にスタッフ全員で考えた。ちょっとした会話に重要な思いがあると気づいた。視点を絞る為に肯定的な発言を繰り返し、全員が納得する視点に絞った。実際の看護には囚われずに意見を出し合い考察した。これにより、利用者の全体像がよく見え、よりの確かな視点と看護が明らかになった。実際の看護が良いケアであったこともわかった。本人の意思を叶えるための家族ケアの重要性、本人、家族が理解できるように物事を伝える重要性を再認識した。また、このようなカンファレンスは、ケアの途中で開催すれば、早期に良いケアを提供することが出来、担当看護師一人で悩みを抱えることもなくなるというデスカンファの有用性を実感した。看護師はデスカンファに対し肯定的にとらえることが出来、自分たちにとって必要なものと実感した。自分たちのグリーフケアにもなった。

P-2-22

児童養護施設での性加害事例の分析及び今後の対応について

名古屋第二赤十字病院 泌尿器科¹⁾、性暴力支援センター日赤なごや なごみ²⁾、名古屋第二赤十字病院 産婦人科³⁾、名古屋第二赤十字病院 小児科⁴⁾、名古屋第二赤十字病院 総合内科⁵⁾

○山田 浩史¹⁾、坂本 理恵²⁾、片岡笑美子²⁾、石井 睦夫⁴⁾、加藤 紀子³⁾、野口 善令⁵⁾

【目的】中学生男子同士による肛門性交を行った事例の診察をとおして、養護施設におけるその対応につき考察する。【事例概要】当事者は中学生男子2名(A、Bとする)。夜間にベランダで性的行為を行っているところを施設職員が発見。(挿入した側をA、された側をBとする)その時点で合計15回程度行われていた。LGBTでもなく共に幼少期から同施設内で生活していた。家族背景として、男子Aは父親も施設育ち。既に他界。母親は養育能力乏しく児童相談所の判断で措置入所となった。男子Bは、両親は離婚、父親も施設育ち。現在引きこもり生活。母親はうつ病。児童相談所の判断により措置入所となった。外来受診時、男子Bに対しては性病チェック目的にて採血実施。肛門部裂傷などの有無を確認。特に所見認めなかった。男子Aを診察。当人も小学低学年時、上級生から性器を舐めるよう強要された経験があった。以前より(女児に対して)性的問題行動が見受けられていた。両者ともに性感染症の陰性を確認。その後外来通院とした。施設の対応として男子Aは、教育指導後、他施設へ移動。通学する中学も転校となり、通院も中止。男子Bは児童相談所にて性教育についての指導及び振り返り実施され、当院通院フォロー中。【考察】今回診察を通して、養護施設内の人間関係のあり方・自立支援・社会への適応についての支援・自尊心を育てる対応など施設内での子どもを取り巻く環境がどのようなものかを考察した。加害者は違う施設へ移動させ、接触を断つこと以外に受け入れられているという安心感をもつことが出来る環境の改善も重要と思われる。

P-2-24

外来業務の統一化を目指した取り組み

山口赤十字病院 外来

○原田裕美子、佐々井京子、阿比留和子、鹿毛 沙智

【取り組みの背景】在院日数の短縮化や在宅医療の推進に伴い、外来看護師に求められる役割は多様化してきている。各科外来の看護師は日替わりのリリーフ体制をとっており、同様の業務でも各診療科で手順が異なることにストレスを感じるという意見が聞かれていた。そこで、各科独自で作成・使用していた入院時チェックリストと、複数の予約検査説明用紙を同一のものにする事で、外来業務の統一化を目指した。【目指す姿】外来業務の統一化(一業務同手順)を図ることで円滑に業務を行うことができ、リリーフ看護師のストレスが軽減される。【取り組みの実際】各科の入院時チェックリストおよび検査説明用紙を集約・検討し、ひな型を作成した。入院時チェックリストは病棟への情報提供としても活用できるようにした。検査説明用紙は1枚の用紙に計画や絶食の有無等を記載することで患者への説明が簡略化できるようにした。これらを外来看護師全体に周知した後に使用開始し「入院時チェックリスト」「説明用紙」についてアンケート調査を行った。【結果】外来看護師を対象に行ったアンケートから、「入院時チェックリストが統一されたことで使いやすくなった」「要領よく説明出来るようになった」という意見があった。また、書式の変更がきっかけとなり、病棟・患者からの問い合わせが減少したという意見も聞かれた。【考察】一業務同手順としたことで、看護師の混乱がなくなり、検査説明に要する時間や入院時カルテ準備の時間短縮につながった。また、リリーフ看護師は、各科独自の方法を覚える必要がなくなった。業務を統一したことで、リリーフ看護師のストレスが軽減できたと考える。

P-2-21

対応困難症例への倫理コンサルテーションの関わり

名古屋第二赤十字病院 倫理コンサルテーションチーム

○久田 敦史、永富美知子、高原 悠子、坂本 理恵、川田 新一、野口 善令、稲葉 一人

【目的】当院では、2015年2月より、臨床倫理コンサルテーションチームを立ち上げ、様々な倫理的ジレンマを経験してきた。依頼の中には、対応困難症例へ対応に関することも多く、症例を提示し、どのような対応が望ましいかについて検討する。【方法】倫理コンサルテーションチームへ依頼のあった症例を取り上げ、対応困難症例への対応を検討する。【成績】事前に受け入れの準備を行い、どのような対応を行うかを検討した。事前の情報共有によって、絡み合う問題を整理し、様々な対応策を事前に考えることができ、余裕を持って、対応することができた。また、関わりを持つ中で、事前の情報と異なる部分が確認できた。【結論】対応困難症例については、事前の情報共有を行い、対応を検討し、それぞれの状況に応じた対応ができるようにすることが望ましいと考える。そのためには、ある程度の人的コストが発生すると考えた。

P-2-23

業務量調査による看護業務効率化の効果測定

旭川赤十字病院 看護部

○杉山 早苗、松井 祥子、千代 慶子、平岡 康子

【はじめに】A病院は稼働病床数480床の急性期病院であり、看護師の時間外勤務時間は年々、増加傾向にある。そのため、看護職員の負担軽減および看護業務の標準化を目的に2017年度、業務効率化プロジェクトが始動し、「入退院業務」、「看護記録」、「配業業務」、「リーダー業務」などのワーキンググループ(以下WG)で業務効率化に取り組んだ。始動と同時に、富士通フィールドイノベーション(以下FI)を活用して、業務量調査により看護業務量を可視化し、業務効率化の効果測定を行ったので報告する。【目的】業務量調査で看護業務効率化の効果を測定する。【方法】調査期間は2017年度と2018年度の同月平日5日間で、一般病棟で日勤帯に勤務する全看護師を対象とした。調査票は3つの大区分の「直接ケア」、「間接ケア」、「その他」を43の看護業務で構成し、対象看護師が10分単位で入力した。データはWGに関連する項目で分析した。2017年度はFIを活用、2018年度は看護情報管理室看護師が前年度と同様に分析結果を比較した。【結果および考察】調査票数は2017年度703、2018年度657であった。2018年度の結果および前年度との比較では、1件当たりの入院業務時間は59.1分で12分減少、退院業務時間は37.4分で変化はなかった。看護師一人当たりの看護記録時間は75.9分/日で5.2分減少、1部署当たりの内服薬と薬時間時間は376.9分/日で38分減少、一人当たりのリーダー時間外勤務時間は126分/日で54分減少した。各年度の結果をグラフ化して比較したことにより、業務効率化の効果が可視化された。WGの4項目は看護業務効率化の継続テーマである。今後も、業務効率化に活用できる業務量調査を継続していきたい。

P-2-25

診察待ち時間表示方法変更後の評価

旭川赤十字病院 看護部外来部門

○石田 悦子、伊東 真弓、長原 牧子、河村 真澄、小森 裕子、佐藤 弘美

【目的】A病院は、2018年度の1日平均外来患者数900名、予約患者の診察待ち時間30分以内が60.5%、1時間以上が6.5%だった。苦情も聞かれ、待ち時間を掲示しているが予測が難しい状況がある。今回、診察待ち時間表示(以下表示)方法を変更したため、その評価を行い課題の明確化を目的とした。【期間】2017年12月~2018年12月。【対象】表示変更前から通院中の11科の患者550名とその外来11部署。【方法】表示「現在診察中の予約時間」に変更後アンケート調査を実施し単純集計、意見を集約した。内容は、患者に対し表示変更の理解、待ち時間の活用、部署に対し利点と欠点、その他双方の意見とした。【倫理的配慮】倫理委員会で承認を得た。【結果】患者の回収率99.8%。回答は表示の変更を知っている64%、知らない36%。64%中表示がわかりやすい88%、わかりにくい12%で、理由は「掲示物や字が小さい、場所が不明」。待ち時間の活用はできた82%、できない18%。意見では「待ち時間を他の用事に使用」「ストレス減少」「時間の予測が困難」「プザー導入の提案」等があった。部署の回収率100%。回答は、待ち時間の問い合わせが減少8部署、表示活用で説明が容易3部署、替える余裕がない4部署、その他予約患者以外の対応ができない等があった。【考察】変更した表示は患者にとっては、待ち時間の活用とストレス減少につながった。部署にとっては、問い合わせの減少と説明が容易となり待ち時間に対する細やかな対応が可能になると考える。また、提案のプザーは今年度導入となり、課題は受付事務等と連携し細やかな掲示の変更と工夫、予約患者以外の対応である。【結論】表示の変更は、予約患者の待ち時間の活用とストレス減少、部署の細やかな対応が可能となった。課題は多職種と連携した掲示の工夫、予約患者以外の対応の検討である。

一般演題(ポスター)抄録
10月17日(木)